「おめぇらの家よ、全部、こっちで出してやっからな」
義父が、空になった湯呑を置きながら言った。
「えっ……全部？」
奈津子が目を丸くする。
「全部だ。土地も、建物も。心配すんな。孫のためだ」
広い座敷で、蚊取り線香の出す一筋の煙だけが、ゆっくりと動いていた。
「そんな……いいの？」
奈津子が、戸惑いながら笑った。
「いいに決まってら。若ぇもんは、先立つもんねぇとな。な？　それでいいよな、明夫さん」
奈津子が、ほっとしたように私を見た。目が期待に揺れているのが分かった。
だが、私は首を横に振った。
「お気持ちは、ありがたいです。けど、それは受け取れません」
義父の眉がぴくりと動いた。
「なんでだぁ？　何が気にいらね」
「気に入らないわけじゃありません。ただ、自分の家のことですから」
義父が奈津子の顔を見る。おまえの旦那は、何を言ってるんだと、その目が語っていた。
「バカ言ってんなぁ。家ぁ建てるのに、意地張ってどうすんだ。おめぇの稼ぎで何ば建てれるの」

義父の声が、少しだけ大きくなる。奈津子が、私の腕をそっとつかんだ。
「お願い……考え直して。夢だったんだよ。明るいリビングとか、ガーデニングできる庭とか…」
「わかってる」
「だったら、なんで……？」
「わかってるけど、ダメなんだ」
声が詰まった。ちゃぶ台の向こうの義父が、身を乗り出す。
「明夫さんよ、あんた心意気だけ立派でも、稼ぎねぇべ。親が子ぉさ助け舟出すのが、気に食わねえのか」
奈津子が、泣きそうな顔になった。
「そんなことないよね？　ね？」
奈津子が手を握ってきたが、私はそれを振り払った。
「私の城だ。誰の金でもない。自分の金で建てたい」
義父がふうっとため息を吐き、湯呑を手に取るが、空だったことに気づき、チッと、舌打ちをした。
「好きにしろじゃ。奈津子……おめぇ、大した旦那さ、もらわれたな」
奈津子は、もう私を見ていなかった。肩を落とし、小さくうなだれていた。
私は、膝の上で拳を固く握りしめていた。